

街づくり 市民主導 社会的基礎体力

1. はじめに

著者は今日的な閉塞感のある社会の健全化に向けてどうすべきか長く検討している。なぜこの種の問題に対処するかといえば、地球環境危機の問題がここ数年特に緊急性を増してきたからである。解決としては、市民の日頃の暮らしの健全化を目指して小規模で身近な次元からの街づくり・村づくりに期待すべきと考えた。もとより街づくりは、街の活性化の一環として観光や伝統保存等に加え、生活環境向上や環境保護についても取り組まれ、成果を上げている。これらの街づくりは身の回りの事のみならず、究極的には社会を支える地域活動として位置付けられてもいる。

本稿の目的は、大上段に社会そのものを議論するのではなく、身の回りの活動が如何に社会づくりとつながりを持っているかを明らかにすることにある。すなわち、社会的基礎体力を街づくりから作り上げる過程を論究する。具体的には、理念を述べ、次いで事例検討として基礎体力的な視点から富山におけるいくつかの街づくりを概観・分析し、今携わっている中山間地域の小さな村づくりと街道筋宿場町の街づくりについて実践を報告する。なお、本稿では、街づくりを地域おこしや村づくりをも含めており、また基礎体力を基土壌礎とイコールとした。

2. 社会的基礎土壌づくり

2.1 問題の所在

社会の根幹に関わる大問題として、人口減少、少子高齢化、格差(貧富、貧困、他)、環境危機(開発、再開発、温暖化、他)、等がある。これに対処するために、世界はSDGs運動を推し進めているが、2030年ゴール到達はかなり難しいともいわれている。それだけに、後継の運動として環境(Enviorment)保全を中心に据えたSEGsがささやかれるようになってきた。それとともに、足元からの活動に期待が高まっており、地域づくりや街づくりを全国各地に展開しようという動きも見え始めている。本稿でも、上記の考えをもって問題に対処することにした。

2.2 基礎土壌づくり

基礎土壌を育む要素にはコミュニケーションと体験を積む街づくりとがあり、これらの育み場所がコミュニティであり、コミュニケーションのコミュニティや街なるコミュニティがある。本稿ではコミュニティをそのように位置付けた街づくりを取り上げるが、ここでいう街づくりには暮らしそのもののコミュニティが基礎土壌となっているとする。なぜなら、そもそも社会は個々の生活の関連させた集合体といえるし、社会は個々の世界の積み上げと捉えているので、身の回り次元での街づくりがその任を担うといえる。また、どのような種類の街づくりでも始まりは基礎土壌づくりであり、身近に小規模から始まる地域の声が集結すると考える。

3. 街づくり一般

街づくりは、地域の身近な事柄から成る主体活動であり、基礎体力に関するものと考え、これまでの街づくりを展望して、街づくりと基礎体力との接点を見ていく。

3.1 地域活性化

街づくりは一般には街の活性化として進められている。この観点で扱われている事象について記す。

(1)地域活性化にむけて

- ・必要性；人口減、生産減、賑わい減、の対策
- ・目標；人口増や関係人口増、地域の富蓄積
- ・方策；賑わい創出、人口増加・人間集積、生活・生業確保

(2)具体的な取り組み

- ・地域におけるシステムの充実化
- ・地域における産業振興
- ・移住促進；人を引き付けて街域の人口増

(3)取り組みの陣容形態

- ・連携には；産官学民連携、学民連携、官民連携
- ・単独では；学先行、産先行、民先行

3.2 街づくりを構成する要素

上記の視点でもって、そもそもの街づくりにおける種類、主体、手動、支援、活動について記す。

- ・種類；賑わい、人口増、住みやすさ追求、生業増進
- ・主体；住民、地域(地域民)
- ・主導；市民主導、市民と専門家(支援、準主導)の協働
- ・支援；大学、研究室、コンサル、企業、行政
- ・活動；特産開品発・販売、農業、植林、他

4. 街づくりと市民の意見

(1)街づくりと住民； 主導者側の街づくりの意向に沿った推進については、多くの住民の賛同を得ないばかりか、突出した様相になることがままあり、すべて順調のように見える取り組みにも種々意見がある。以下に記す。

・街づくりという直ぐに賑わいをとって観光に走りがちだが、住民の住まう充実の観点があれば、たとえ観光化を目指しても奥の深いものになるはず。

・街づくりで人集めの策を練った後に出てくるのは、金の落ちるシステムを考えること。直ぐにマネ中心。それでいいのか。

・住民の充実生活に目を向けた取り組みが少ない。本来の街づくりは住環境の充実であり、そこに生業が入ると考える。

(2)地域おこし(地域づくり)と住民； ・地域づくりは街よりも枠が大きいので、どうしても産業の取り込みが主になることにより、人が集まればいい、マネが集まればいい、といったことになりがちである。ここは、街づくりとして住民の身近な活力が主体になるような方法を考えるべき。本稿では地域づくりも街づくりに含める理由はそこにあり。

・街づくりを健全に進めればその勢いで地域づくりにも反映させることができるはず。それゆえ地域では地域事情が街

づくりを変えることなく、地域と街との併存が目指せる。

・地域おこしの際には、住民の存在が霞みがちである。特に地域おこしではすぐに企業誘致・工場誘致、観光推進、だから。
(3)過疎地域の村づくり； 街づくりでは、そもそも広がりのある街が対象。しかし、村では経済的基盤が脆弱ゆえに、街づくりのような訳にはいかず、却って村ごと移転になるか、村全体での観光化や産業化を目指すことになり、時として危険施設受け入れといった危うさが生ずることもある。

5. 街づくりの遂行に際し

街づくりの遂行には、中心になる方々の発起で市民が集まり、そこに学術や企業や行政が加わるといった構図になる。学術、行政、企業の関わり方として、支援、応援、肩代わり、主客転倒などがある、これについて述べる。なお、支援先や支援内容については以下のとおりである。

・支援先； 地域、文化財、コミュニティ

支援先の人 地域民、行政、

・支援の内容； プラン策定、人集め、資金集め、遂行プラン

(1)主体者、発起人の方々；地域に住む様々な立場の建築の方々（個人設計者や研究者）や開明的な有職の方々（教師や農業者等）、街づくりに関心ある移住者の方々が割合多い。これらの方々は移住者含め地元在民であるので、地域への思い入れも深く大きい。

(2)学術からの支援；・1960年代の公害闘争や開発反対闘争以降、1970年代の積極的対処として良い街づくりが始まった。その後、大学は地域貢献として地域に積極的に関与し始めると、学民、官学民、産官学民として連携がとられるようになり、学生や市民の若い力が中心となっていかななく地域を支えるようになってきた。もちろん学がバックボーンとなっている。

・学術の役割について；教育的役割として、次の時代を担う学生の地域から学びや地域にて学びの実践が当たり前となり、街づくりの体系や社会での位置づけや研究成果の実装が現実化してきた。地域にとっては、学術からの支援はありがたい限りである。しなかながら、地域においてある程度形ができると、研究者の撤退が始まることも結構あるという。

(3)職業人の関わり； 学術従事者も職業人と捉えられるが、ここでいう職業人は、街づくりを専門にする企業人の事であり、コンサル系各位を指している。もちろん建築系の方々も結構入っている。彼らは、街づくりを発議することなく発議者を助ける役目であり、研究者とその意味では変わりはないが、違いは報酬の有無である。だからといって報酬の大小で仕事の重い軽いの規定が先行することはあまりない。しかし、企業の仕事では街づくり仕事の終了とともに企業が撤退していくので、「後のメンとしてかかわりを」との地元の声も多い。

(4)行政の役割； ・行政は、学術の支援を不要として街づくりを実施することもままあるが、その一方では学術の英知と共に街づくりを実施で頑張ったり支援にまわったりしている。後者の場合には、もちろん官と学との連携があり、知恵や知識だけではなく、時として学術との連結協定を結び、常時支援を可能にするケースが増えている。

そうした動きは最近始まったのであり、以前には学術から

の人材派遣（派遣というより学生が飛び入り）がままあった。例えば、長野小布施町では慶応大学から派遣の若手が町長の右腕として働いた（支援した）。その後その方は小布施町長に就任し辣腕をふるっている。

・行政には気になることがある。行政主導で街づくりを進めるといっても、ノウハウを外部に頼り、時として進行までも便利屋コンサルトやイベントプロデュース会社に丸投げのことが多い。このためもあって、街づくりには真摯に市民の声を聞くことが少なく、あるのは関係する市民の声のみを聞くに過ぎないこともあるという。・官民連携については、都合のいい一部の民を対象とし、本来頑張っている民には冷たい対応もままある。

(5)企業のかかわり； ここでいう企業は街づくり会社ではなく一般の企業であり、街づくりを応援している企業である。

・小松製作所は、小松市での地域おこしに社員の地域貢献として、勉強や遊びや祭りなどに積極的にかかわっている。

・高知の神山村では、特徴ある街づくりを地元有志が中心に戦略を練り、町全体に光ファイバーをめぐらし開明的企業の定着に向け整備していた。2010年、IT企業が本社を東京から神山に移転し、移住の社員は業務を遂行するとともに、地域貢献として祭りや環境保護等に精を出している。地域と産業との連携が功を奏している。

・以上の2例はかなり特殊と言え、今後に向けてのパイロットとなっている。なお上記以外にも特徴的ケースはままある。

6. 富山における街づくりと環境保全

ここでは対象を日本全国ではなく富山に限定し、しかも大規模な観光や街づくりは割愛して小規模系に的を絞ることにする。また街づくりには、これを支える環境づくりや環境保全を含めることとした。

6.1 富山の地勢

富山は割合コンパクトな広がりのある地域であり、程よい広さの平野があり、この平野を挟んで海と山が接近している。山から平野と海が見え、海や平野から山が見えることから、富山まるごと感が自然と生まれている。さらにいえば、田舎は自分の家、富山は我らの街、富山は我らの庭といった感覚で、自然環境・地域環境が捉えられている。それが富山に根づく何か気質のようにも感じられ、このためか、富山における文化財が散在していても、富山がまるごと文化の園という自然な感覚に包まれているかのように思う次第である。

では富山が特別かということではなく、どの地域でもそれぞれの個性が基礎となって土地柄の感覚を源にした沸き上がるパワーが地域を魅力的にするものである。

6.2 地域づくり

地域づくりは大規模系街づくりとしておく。県域全体を地域として捉え、大規模な観光地を核に種々の観光地をもネットワークで結ぶ富山まるごと計画というべき構想が展開され、そこにおいては、県域全体の成長戦略の下、立山のブランド化を始め、経済と市民生活の一体化がもくろまれているかのようにみえる。この種の問題の論議はもちろんのこと、立山や黒部峡谷などの大規模観光はここでは割愛する。

6.3 街づくり

観光には、住民や風景・伝統など多様な要素が複合している。どこでもそうだが、一つの要因だけではパラーが漲らず、集客が困難となるという。このため、観光はいくつかの要因を複合させて事に当たることになる。以下に、街づくりとして観光、伝統保全、住まい充実、等を項目ごとに主な地域をも記すことにする。

a. 観光、自然や伝統を目玉に

自然鑑賞；集落と自然；五箇山、大岩、他
伝統集落；五箇山(菅沼、相倉)、八尾、砺波散居
街；井波、山町筋、金屋町、吉久、滑川、岩瀬
伝統芸能；八尾おわら、福野麦節、他
伝統祭り；新湊、魚津かんとん、他

b. 保全と活用；上記の集落や街において、活用中心に活動

c. 住まう環境づくり；住み続けて守る住まいと風情

文化材指定の個人宅も改修まなならずとしても

6.4 村づくり

街づくりの取り組みは数多いが、村づくりになるとめっぽう数少ない。昭和の大合併以前に村としていた地域は平地であれ中山間域であれ、村と呼ばれている。また町を村と呼んで愛着を喚起することもある(他県例、石川津幡でのコンパクトビレッジ構想は妙なのにあえてビレッジとする)しかし、富山では合併前が村であっても村とは呼ばず、中山間域に限定した村を対象(津幡のケースは別にして)とすることにしておく、対象の村では領域が狭く、その意味では小さな村という呼称が適切である。ただし、村においては、街づくりのような賑わいがないにしても一軒家とその周辺自然環境とのセットを小さな村とか一軒村することもありとした。

小さな村の構成を列挙する。

- ・イメージ；家が散在しかつ人もまばらの村を対象
- ・種類；生業確保・推進、環境保全、環境に親しむ
- ・主体；村民、にわか村民(訪問者の本宅と村とが繋がる)
- ・主導；村民、にわか村民(訪れた方々の総称)
- ・支援；研究室、市民(周辺市町村)、
- ・活動；農作物(米・野菜)づくり、下草刈り、水源・用水確保、森林・植物・動物等自然鑑賞、静寂さ体得、他

6.5 環境保全

街づくりという形態をとらなくても、街の発展の下支えとして、森、田畑、等を守るとか、安心安全の提供とかの取り組みがある。例を挙げれば；

- ・焼き芋屋さんが山を守り、平地で芋を栽培し、間伐材を燃料にして芋を焼き、焼き芋ファンを喜ばせている。
- ・自然栽培農家は山や谷を守り、安心安全な米や野菜作りに精を出し、植生や風景を守っている。なお、自然栽培派の方々、上市、立山、氷見、南砺、等で頑張っている。
- ・山において生計を立てている方々は今でもおられるが、安い外材に押されっぱなしの県内産材では報われないという。とはいえ、頑張してほしいものである。とにかく、林業による山の保全は、山崩れや下流域での洪水の防止には欠かせないことはいまでもない。

6.6 街づくりにおける人間模様

各街づくりを対象に街づくりにおける人間模様について述べる。

6.6.1 街づくり人間模様

多くの伝統的な街における特徴的な活動は、携わる人間や各人の「バックグラウンド」を形成する環境の産物であり、当該地の個性そのものといえる。これが我らの求める身近な小規模の社会づくりそのものなのである。ここにそれらをまとめて街づくりの英知として特徴的なものを列挙する。なお、本稿では各街づくりの詳細を記さなかったため、初めて目にする方々には可能な限りイメージをお願いしたい。

(1)井波(写1)；「木彫りの街」として有名な井波の街。伝統建築と生業とが一体となった街においてその保全には、県内初となる「区域内の歴史と伝統を守り、うるおいのある美しい町とする協定」を町内毎に制定した(2005年)。以下、細目を記す。

・協定者は；建築物の敷地内の緑化及び既存の樹木等の維持管理に努力、協定の区域内の美化(清掃活動・花植え活動)努力、建築物の新築・増築・改築には位置・形態・色彩に配慮

・建築物は街並みと調和のとれたまとまりのあるデザイン、建築物の屋根には有勾配・黒や灰色の日本瓦、外壁の色彩は黒や茶系統又は白色、木製のドアや引き戸の活用、看板は木製、木彫りの表札

・街路灯・案内板・看板等の整備に協力、歩行者や住民の交流及び利便性が良好に保たれるよう努力

(2)吉久；地味な街ゆえか、日常を地味に営んでいる住民の皆さんで街を守る気風がある。街中にギャリ付きの喫茶店を中心にコミュニケーションに華が咲いている。最近、元大学教員がここに居住され、皆さんと挨拶を交わしている。たかが挨拶一つとしても、住民の喜びはコミュニティでは当然である。

(3)八尾(写2)；ももとは生業の町、そこに土着の祭りとして八尾おわら踊りがある。伝統の舞踊を若い世代に伝えるために地域一丸となっており、通常の日常生活までコミュニティが機能している。そこにおっちゃん八尾っ子の親父として存在。

(4)上市護摩堂；大岩から7km程北の中山間域には、弘法大師がこの地で神水を沸き上がらせたという伝承の地。今では食事処(八十八)として一軒のみが残っている。定住者はそこのご夫妻のみ。一軒家食事処は県内には幾つもある。

(5)大岩(写3)；人と自然が一体となる一軒村あり。7章

(6)滑川(写4)；街の風情をつくる各種伝統建築。ここれが拠点として市民の拠り所となり、伝統美のオーが周辺に拡散している。7章

6.6.2 お祭り

富山では著名な祭りは以下のとおりである。津沢夜高あんどん祭り、新湊曳山祭、高岡御車山祭、越中八尾曳山祭、岩瀬曳山車祭、滑川のネブタ流し、魚津のたてもん祭り

祭りは地域おこしや街づくりの大事な歴史的な文化であり、地域の結束や世代間交流により、伝統を守る取り組みが続いている、本稿では街づくりのうち、居住を中心に論じているので、祭りは割愛とする。

7. 実際の取り組み事例

7.1 北陸街道滑川宿街並み

「声がかたまる往来」と題した街づくりとして北陸街道越中路の宿場町「滑川宿」において、10 数年前から伝統文化の保全を目指した現代の文化アセスがつくられている。滑川宿が現滑川市の中心に位置し、「日常生活の一部ここにあり」の雰囲気がつくられている。そこには、街の伝統のお祭りや現代的なイベントもあり、街の「古今」混在が功を奏している。

特徴的なのは、旧本陣の町家が地域の中核となり、住民の街の拠り所となっていること。何かにつけ住民はここに集まり、活動するのである。例えば、地域との関係で行事といえば、雛祭りがある。旧本陣建物において、各家庭で使われなくなって寄贈され保管されているお雛様を雛祭りに一堂に展示して大公開するのである。旧本陣上屋が極めて大きいものだから、二十数組のお雛様も鎮座して生ずる存在感がイターとなっている。そうした取り組みは、展示方法の創意工夫もさることながら住民の拠り所の賜物として成立している。

この街の担い手は地域の街衆各位であり、学術には地元の研究者も加わり、運動が続いている。特別に行政や企業からの支援を受けていないこともあって、市民のための街づくりが貫かれていて、滑川宿は滑川のバグボーン形成に大いに貢献している。

7.2 富山中山間地域大岩の小さな村(一軒村)

富山大岩地域の古民家とその周辺域において、10 数年前から特別に意識することなく、親子の居場所づくりから中山間の村づくりへと活動を広げている。これが一軒村と周辺からなる一軒村であり、その周辺にはいくつかの小規模な村がある。一軒村は村を支える長期滞在のボランティア、時折応援の周辺各位、全国各地からの一時滞在の訪問者から成っている。とりわけ、訪問者の環境へ思い入れと環境からの思い受けが人と自然を一体にさせ、訪問者のただそこに居るという関わり方が一軒村を賑やかにしている。また一軒村はコミュニティの原点を彷彿とさせている。一軒村の様相を記す；

- ・土地・大地・空間の居を介した複合(複相というべきか)
- ・富山どこの場も思い入れの場。訪問者の自宅にも影響及ぶ
- ・自然環境や人間環境が一体となって実感
- ・全国の訪問者と村の間には思い入れが実感として繋がる
- ・著者らが手掛けている富山の中山間での小さな村では、地域まるごとが自然との一体化に調和しており、訪問の親子を含め皆さんが自然環境・人間環境を楽しむことを可能にしている。また、そうした体験の積み重ねが親子のみならず皆さんの人間性を育てている様を見ることができる。
- ・生活の営みの根幹を実感(セスとそこからの精神性)；ありのままの思考と行動、自然感性の宿り、場と人の世界にて一体かつ相互に作用、人間同士や親子の織り成す場、遊びのコミュニティ、何もない森ではなく何でも見つけられる森(自然も)

8. おわりに

本稿の今ひとつの視点から「おわりに」を構成；市民活動においては、種々の施策には市民の声が反映されにくく、これまでのようなパブコムや説明会(時には行政主導の市民会議)では不十分さが否めないで、施策の前段階に市民側の力を発揮させるために、市民側の社会的基礎体力の醸成を不可欠

と考え、この基礎体力形成に向けて論を進めることにした。これには、コミュニケーションのコミュニティと街づくりが両輪となるとして、本稿では街づくりに着目し、かかる目標に向けての街づくりの果たす役割を検討することにして、街づくり一般論から始まり、富山での実践をもとに街づくりを考察した次第である。

論議の結果を以下に記す。

(1)コミュニティ面からの各街づくり、主な(著者判断の)特徴；

- ・地域一体で家族的コミュニティ；八尾。おっちゃんが八尾っ子の親父
- ・中山間地でゆっくりとにわか居住；大岩山間地
- ・街の風情を街づくり協定により守る；井波、
町内会単位で協定。そぐわなければ新築・改築の禁止
- ・市民の拠り所として風情ある建造物；滑川、
旧本陣建築が風情を醸し出す。
- ・地味に町衆で守る気風。歩いて親しむ街；吉久
- ・地域全体を守る憲章制定；(県外だが)竹富島
人間環境と自然・社会環境の保全。開発禁止
- ・街の訪問時を思いおこし訪問者各自宅・周辺で配慮可；井波
- ・訪問者と環境とが一体で思い入れが自然と磨く；一軒村

(2)街づくり；住民や訪問者に対し、都会論理からの規制は何もなく、その意味では街においては都会も田舎も対等であり、自律があり、「個からの始まり」や「足元から」といった所からの社会があるといえる。これが社会的体力形成のなす場であり、街であるといえる。こうした要素が日頃の街づくりには、しっかりと組み込まれており、かくして勢いがより増してくる。また、街は単独でも凛と構え、かつそうした街を大気があたかも包んでいるかのようでもある。こうして、足元の世界が積み上がって、地域やその上位のものへと繋がっていき、これまでの大規模かつ複合肥沃な世界に向け、足元からのぬくもりが向上していくと考えることができる。

(3)まとめのまとめとして街づくりとは；個々からの思考・行動・感性が(生業含め)暮らしを充実させ、それこそ今はやりのウェルビーイングを形成していく。こうした活力が身の回りで街をつくり、地域やその上位へと積み重ねていく。その原動力が街づくりであると考え。また、街づくりには、老若男女が基本。新しさと古さの(歴史を含め)共存・調和。そのため調和保全と調和づくりとがより大きな世界へのセスと思考・行動の源、と考える。今後はより具体的な議論を進める。

▲謝辞；本論の展開に際し数多くの方々で議論し、また各地の街づくりの方々にも大変お世話になりました。皆様方に記して謝意を表します。



左写1
井波

右写2
八尾



左写3
大岩

右写4
滑川